

報告

「モダン都市京城の巡礼 鍾路・本町」巡回展報告

富井正憲
TOMII Masanori

[展覧会]

2011年12月に横浜の神奈川大学で「モダン都市京城の巡礼 鍾路・本町」の巡回展が開催された。神奈川大学での巡回展は2011年3月のソウル市清溪川文化館、そして10月の駐日韓国大使館東京文化院に引き続き、第3回目である。本稿はその展覧会内容についての報告である。

1920年代中頃の京城（現ソウル）には朝鮮総督府、朝鮮神宮、京城府庁舎、京城駅と主要な建物が次々と登場した。そして1929年には施政20周年を記念して景福宮内で大規模な朝鮮博覧会が開催され、半島の内外から多くの観光客が京城を訪れることにな

る。1930年代の京城は商工業が発達し、都市の人口が急激に増加してくる。今巡回展で上映された清水宏監督の映画『京城』には市内に官公庁や学校、会社などの大規模な建築から日用品を扱う小さな商店や住宅までもが建ち並び、百貨店、お土産屋、劇場、ホテル、動物園、植物園、野球場、競馬場、ゴルフ場などの観光娯楽施設から大きなショーウィンドウ、夜市場、街灯等々モダン京城の昼夜の都市風景がよく映し出されている。またこの時代には旅行者用に案内本やパンフレット、それに絵葉書もたくさん出された。

こうしたビジュアルでオリジナルな成果物を用いた非文字資料による今展覧会は訪れる人々に1930年代



図1 南山より見た京城の都市風景



図2 案内本や地図の展示物

のソウルの都市空間とその市民の生活を知ってもらう契機となり、かつ、当時そこで生まれ育った人々には記憶の再現と自己確認の場となった。

またソウルを代表する北村、南村の復元した2つの通りの実証的な基礎的成果物は、都市や建築の研究者には勿論のこと、映画、文学、経済等の他分野の研究者にも貴重な学際的資料を与える機会になった。

これまでの復元製作過程と巡回展では当時をよく知る方々に復元地図をご覧いただき、貴重な指摘や資料をいただいているが、更にこの巡回展を通して当時をよくご存じの方々との出会いが生まれ、若い研究者がこの展覧会から育ててほしいと願った。その意味で歴史地図作成作業はこれで終了したわけではなく、本巡回展が出発と位置付けている。

「モダン都市京城の巡礼 鍾路・本町」展は

- ①「京城」という言葉が使われた初めての日韓両国での巡回展であること
- ②1930年代の一般市民の都市生活、文化を照準にしていること
- ③展示のキーワードは「比較」である。市民と観光旅行者とによる人間比較、「鍾路」と「本町」による朝鮮人商店街と日本人商店街の空間比較、1940年の「京城」フィルムによる現代との時間比較
- ④ビジュアルな展示構成～地図、図面、映像、絵葉書（模型）

以上の4つの大きな特徴をもつ。

研究は正確な記録と復元を目指して次のように進められてきた。

1986年にスタートした鍾路・本町両商店街通りの

地図の復元作業は詳細な地番入り地籍図がなかったために「京城地形明細図」と「京城府管内地籍目録」（1927年発行、1917年発行）を入手し、その地籍図を1枚1枚つなぎ合わせ、拡大して地番入りの鍾路・本町2通りの街路・街区図を作成することから始まった。出来上がった2つの街路図をベースにして長さ、幅員、勾配、形状、路面状況等についてとりあげ、街路・街区の構造を検討するとともに京城府の歴史、案内、便覧、調査報告書等の文献資料を用いて、2つの通りの利用状況、土地所有者、土地価格について分析し、鍾路と本町の比較考察を進めた。

次に鍾路と本町の商業構成の検討と当時の商店街地図を作成するために電話番号帳、商工名録、商店街調査資料、写真帖、絵葉書等の当時の文献を併せ用いて、この資料の中から両地域の商店を抽出する手順を踏んだ。商店ごとに商号・氏名・国籍・業種・地番等の入ったデータベースを作成し、鍾路通り1439件、本町・新町通り1725件、2つを合わせた総データ数が3164件にのぼり、その結果を用いて業種別・各丁目別特徴を分析している。地番の判明している商店は作成した地籍図にプロットして当時の商店街図を作成して当時の商店街を正確に記録し復元するようにした。特に既存の商店街構成図、地番入り地図、及び商店記入地図とのすり合わせ補填が重要で「鍾路式参丁目商店街構成図」（南側135軒、北側134軒 合計269軒）（京城府商店街調査、京城府、1936年8月）、「本町一・二丁目商店街構成図」（南側103軒、北側108軒 合計211軒）（京城府商店街調査、京城府、1936年8月）、「京城精密地図」、「龍山精密地図」（計2枚 色刷り 縮尺4000分の1、1933年発行、三重出版社京城支店発行所、白川行晴著作兼発行者）、「地番地区入大京城精図第5号」（1枚 縮尺6000分の1、1936年、至誠堂発行）を用いている。併せて建物の図面、写真、絵葉書、広告等の他データのチェックも行ってきた。

地図製作作業の過程でその地域で生まれ育った人々に復元地図のチェック確認をしていただくことにし、日の出小学校同窓会「京城日の出会」、桜井小学校同窓会「さくらい」幹事尾実氏（本町5丁目・雀のお宿）、三坂小学校同窓会「鉄石と千草」記念誌編集委

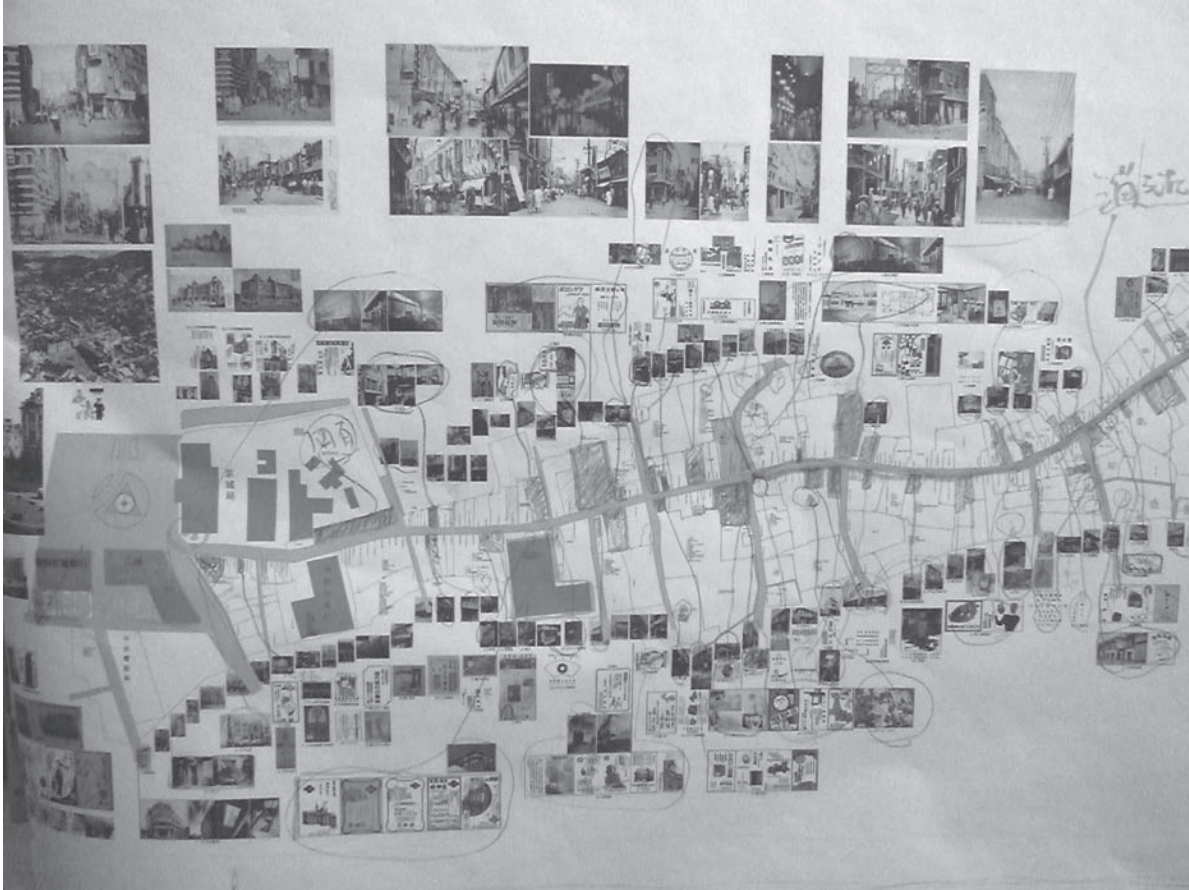


図3 復元作業中の本町地図

員とコンタクトを持たせていただいた。更にその時に貴重なイメージマップの提供も受けた。また今回の展覧会においても復元地図について様々な情報や指摘をいただき、なかにはこれまで大切に保管して来た写真類や記録帳の寄贈も受けた。

写真その他非文字資料については『大京城写真帖』（1937年発行、中央情報鮮満支社編出版、1987年に宮塚利雄現山梨学院大学教授より複写本を入手）、『大京城都市大観』（1937年発行、朝鮮新聞社発行所、和田重義著作・発行人、題名は異なるが内容は『大京城写真帖』と全く同じ）、当時の絵ハガキ及び各店広告は20年以上にわたって古書店を中心に収集してきた研究者個人所有資料を中心としている。鍾路・本町の現況商店街パノラマ写真は2010年と2011年の街路樹が落葉した冬の時期の写真を合成し、作成した。また松竹株式会社にて特別許可をいただき、映画『京城』（1939年、清水宏監督、朝鮮総督府鉄道局、松竹制作）の放映を会場で行っている。この他には1930年代を中心にした案内書等は個人及び学習院大学、東京

経済大学、韓国の図書館・博物館が所有している『大京城』（朝鮮毎日新聞社、1929年）『京城と仁川』（大陸情報社、1929年）『新版大京城案内』（京城都市文化研究所、1936年）『京城情緒 上下』（京城観光協会、1936、1937年）を主に用いている。

建築図面は月刊誌『朝鮮と建築』（1922年～1945年各月号、朝鮮建築会発行）から選択している。なお、月刊誌『朝鮮と建築』全巻（公的機関欠号の創刊号と



図4 来館者からの貴重な寄贈資料

主要なる建築物リスト (1922~1945)





















| | |
|---|---|
| <p>朝鮮神宮 所在地 京都市南山 建築年 1925年 設計 京都市内務局建築課 伊東忠太 (設計顧問) 備考 取り壊された</p>  | <p>京都市 所在地 京都市古町 建築年 1925年 設計 総督府鉄道工務課 備考 現ソウル駅</p>  |
| <p>朝鮮総督府庁舎 所在地 京都市景福宮内 建築年 1926年 設計 ゲーデラランダー、 野村一郎・富士岡重一、 岩井長三郎・園扶博 備考 現国立博物館</p>  | <p>京都市庁舎 所在地 京都市太平安通 1の31 建築年 1926年 設計 総督府土木部建築課長 岩井・福慶一 備考 現ソウル特別市庁</p>  |
| <p>聖公会聖堂 所在地 京都市真柄 建築年 1926年 設計 エス・デクソン 備考 現聖公会ソウル聖堂</p>  | <p>三法院 所在地 京都市真柄 建築年 1928年 設計 不明 備考 現高等法院</p>  |
| <p>京城電気会社 所在地 京都市南山5通 2の5 建築年 1929年 設計 小笹徳蔵 (清水組) 備考 現韓電本社</p>  | <p>朝鮮総督府商工労働館 所在地 京都市南山通 4 建築年 1929年 設計 総督府官房会計課 備考 現大韓貿易振興公社展示館</p>  |
| <p>三越 所在地 京都市本町 1の52 建築年 1930年 設計 三越建築事務所 備考 現新世界百貨店</p>  | <p>三井百貨店 所在地 京都市本町 1の45 建築年 1933年 設計 清水組設計部 備考</p>  |
| <p>尊厳山博文寺 所在地 京都市西四軒町 建築年 1932年 設計 伊東忠太 備考 取り壊された 尊厳山博文寺碑あり</p>  | <p>東京火災保険株式会社京城支店 所在地 京都市南大寺通 3の106 建築年 1933年 設計 渡辺仁建築事務所 備考 現存 早野氏住宅あり</p>  |
| <p>朝鮮貯蓄銀行本店 所在地 京都市本町 1の52 建築年 1935年 設計 平林金吾 備考 現韓一銀行</p>  | <p>京都市府民館 所在地 京都市太平安通 1の60 建築年 1935年 設計 不明 備考 現ソウル市民館別館</p>  |
| <p>朝鮮日報社 所在地 京都市太平安通 1の61 建築年 朴東鎮 設計 1935年 備考 取り壊された</p>  | <p>徳府官呉術館 所在地 京都市真柄 1 建築年 1937年 設計 中村与寅平 備考</p>  |
| <p>和信本館 所在地 京都市建路 2の3 建築年 1937年 設計 朴吉龍 備考 現和信百貨店</p>  | <p>朝鮮ビルヂング (半島ホテル) 所在地 京都市黄金町 1の180 建築年 1938年 設計 高橋建築事務所 備考</p>  |
| <p>景福宮博物館 所在地 京都市景福宮内 建築年 1939年 設計 矢野聖 備考 現民俗博物館</p>  | <p>泰和基督教社会館 所在地 京都市仁寺町 9 4 建築年 1939年 設計 ヴォーリス建築事務所 備考</p>  |

図5 データベースから作成した主要建築物リスト

最終号は牧園大学金晶東教授より1986年に複写本をいただき、全巻揃う)の建築物情報のデータベースは1987年に私が神奈川大学在籍中に学生諸君と作成して発表公開し、現在は韓国でも研究者に広く利用されている。

最初の成果物の公開発表は1988年の日本生活文化史学会大会において『本町通りと鍾路通りについて～日本時代のソウル都市論』のタイトルで行った。その後新たな研究者を迎え、写真や広告の追加資料を補充し修正を加えながら作業をすすめ、2010年に韓哲文化財団の助成を受け今巡回展に到っている。

尚われわれの研究とは別に、本展示会より4年前の2007年に東京大学大学院の博士(工学)論文で金銀真さん(現東京大学研究員)による鍾路の復元研究発表がありましたことをここにあわせて紹介しておきたい。

巡回展の主な展示物は以下の通りである。

- ①1930年代北村鍾路通り商店街復元地図+現況パノラマ写真(縮尺1/300)「光化門～東大門」
- ②1930年代南村本町通り商店街復元地図+現況パノラマ写真(縮尺1/300)「本町1丁目～新町」
- ③絵葉書、精密地図、鳥瞰図
- ④当時の京城案内文、交通案内図
- ⑤建物図面と概要説明文、商店建物位置図、商店街調査表
- ⑥地図作成に用いた当時の出版物(電話帳、商工名録等)
- ⑦1940年制作清水宏監督の映画『京城』と現在の比較映像
- ⑧復元作業過程の資料と発表論文

次にその展示物の中からいくつかの具体的なテーマを取り上げ、ここに紹介しておきたい。

[本町・鍾路]

本町は1882年に日本の公使館がソウル南山の城郭内の北面山麓に置かれ、その周辺が日本人居留地に指定されてから生まれた街である。日本時代に京城（現ソウル）内で最も繁華な街として日本人銀座街とよばれ、本町の漢字をデザインしたゲートとすずらん模様の街灯が特徴で、内地の銀ブラならぬ「本ブラ」という愛称で府民や観光客に親しまれた。現在は忠武路と名前を変えながらもソウルーの繁華街明洞に隣接して、旧本町1丁目地域は今も繁栄している。しかし他の地域は僅か一部分に当時の街区構造と建物を残しながらもすっかり衰退し面影も少ない。

鍾路は朝鮮王朝時代初めにつくられた街で、植民地時代には本町に対比して朝鮮人の銀座と呼ばれた。朝鮮王朝時代には鍾路1丁目に六矣廬（王朝特別許可の六種の商売）が置かれたために、早くからソウルの商業の中心として商いが活発に行われ、市も開かれた。

城郭内を東西に走る幅広い鍾路通りは現在も市内有数の道路として、基本構造を存続しながらそのまま使用され続けている。日本時代には地上に路面電車が走っていたが、現在は代わって地下に地下鉄一号線が走っている。

日本時代の2つの通りの特徴を具体的に説明してみよう。文末に分析の図表を添付しておくので併せて参照していただきたい。

本町通りは南山北面のすそ野を西から東に細く延びる。朝鮮銀行前ロータリー広場から1丁目が始まり5丁目まで続き、その長さは約1.8kmである。さらにその先の新町遊廓を加えると2kmほどの長さになる。道の幅員は3.6mから7.3mの間で狭く、起伏もあり、蛇行している。路面は簡易舗装仕上げである。

鍾路通りも本町通り同様、城内を西から東に流れる清溪川に平行して位置する。景福宮前光化門通りの交差点から1丁目が始まり東大門の6丁目まで続き、その長さは2.8kmにわたる。道幅は約27.5mから29.0mと広く、路面は硬質舗装仕上げで、平坦で真



図6-1 本町通り2丁目付近の当時の絵葉書



図6-2 現代写真



図7-1 鍾路2丁目付近の当時の絵葉書



図7-2 現代写真

っ直ぐに伸びる。

清溪川を境にした南村の本町と北村の鍾路の2つの通りの性格は大きく異なる。これは2つの通りの成立過程に原因する。本町通りは朝鮮王朝時代には存在せず、日本人居留地に指定されてから自然発生的に伸びてきた道である。これに対して、鍾路通りは朝鮮王朝時代に都が定められた当初よりあらかじめ計画された道路である。

2つの通りの一日の交通状況を見ると、通行人の数は本町1丁目が17239人、鍾路2丁目が15033人とともにさほど違いはない。本町には電車、客馬車、牛馬の交通はない。道幅が狭いため、自転車、人力車、サイドカー等の小さな一般用の乗り物が多い。1927年の都市計画調査時には車が通っていたが、これも30年代には禁止された。これに対して鍾路通りは市電や車の往来が多く、かつ荷馬車、手引車、牛馬、荷担ぎ人等の作業用人車が多く認められる。

街区についてみれば本町は1~5丁目の5つの区域、鍾路は1~6丁目の6つの区域から構成されている。本町の街区形状は不定形であるが、鍾路においては比較的東西に細い長方形が並んでいる。また宅地割についてみると本町はさまざまな変形の敷地が多いが、鍾路は短冊形の敷地が規則正しく配置されている。とくに1, 2, 3丁目はその短冊形が多い。総面積は本町が6万坪弱であり、鍾路が7万4千坪ほどである。鍾路が本町の1.2倍の広さを持つ。

それぞれ各丁目の面積を比較してみると、鍾路1丁目が最も小さくて、最も広い鍾路6丁目の約10分の1にすぎない。人口密度は本町3丁目、鍾路3丁目が高く、反対に本町5丁目、鍾路6丁目が低い。平均すると本町と鍾路に大きな相違は見られない。

本町と鍾路の土地平均価格を較べると、本町が1.4倍ほど高い。各丁目ごとにとみると本町は1丁目から5丁目へと徐々に地価が下がっていく。これに対して、鍾路は1, 2, 3丁目が高く、4, 5, 6丁目が低く、3, 4丁目を境にして2つの地域ではっきりと価格差が認められる。

土地所有者についてみると、1917年から1927年の10年間に土地所有者の数が本町で1.5倍に、鍾路で1.7倍になっている。これは土地の細分化を意味する。会社及び官公庁所有の割合が大きくなっていくなかで、朝鮮人個人所有の割合が減少する。特に本町の割合が2%にも満たなくなる。朝鮮人の銀座と呼ばれた鍾路でも2割も減少している。

次に商業空間について取り上げよう。

商業構成について分析すると本町・鍾路共に買回り品の割合が高い。特に本町では文化品類が多く、鍾路では呉服・洋服商を中心とした衣料品店が多数を占める。鍾路に衣料品類が多いのは朝鮮王朝時代より続く六矣塵の影響と考えられる。この他に本町は飲食店や写真・印刷の加工修理業が多い。これに対して鍾路は材木・炭等の原材料店が多い。本町1丁目には京城府

表1 京城府商店街調査 1936年京城府、京城市計画調査書 1928年京城府より作成

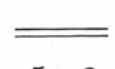
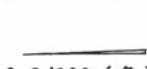

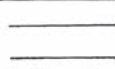

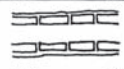
| | 長さ(Km) | 平均幅員(m) | 平均勾配 | 形状 | 路面 | 現況状況 |
|------|--------|--|--|---|------|----------------|
| 本町通り | 1, 80 |  5, 6 |  2.2/100 (急) |  波形 | 簡易舗装 | 変化多し四・五丁目に残存のみ |
| 鍾路通り | 2, 86 |  28, 6 |  平坦 |  直線 | 剛質舗装 | 全体的に残存 |

表2 京城市計画調査書 1928年京城府より作成

| | 人 | 車 | サイドカー | 電車 | 自転車 | 人力車 | 客馬車 | 荷馬車 | 手引車 | 牛馬 | 総量 |
|------|------------------|---------------|---------------|---------------|-----------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|-------|
| 本町通り | 17239 (70.2%) | 46 (0.2%) | 106 (0.4%) | | 5791 (23.6%) | 684 (2.8%) | | 146 (0.6%) | 460 (1.9%) | | 24552 |
| 鍾路通り | 15033 (74.3%) | 125 (0.6%) | 9 (0.04%) | 476 (2.4%) | 3032 (15.0%) | 212 (1.0%) | 13 (0.06%) | 397 (1.9%) | 792 (3.9%) | 140 (0.7%) | 20229 |

表3 京城府商店街調査1936年京城府より作成

| 平均価格 | | 平均価格 | |
|-------|------|-------|------|
| 本町一丁目 | 450円 | 鍾路一丁目 | 260円 |
| 本町二丁目 | 335円 | 鍾路二丁目 | 380円 |
| 本町三丁目 | 245円 | 鍾路三丁目 | 265円 |
| 本町四丁目 | 165円 | 鍾路四丁目 | 95円 |
| 本町五丁目 | 160円 | 鍾路五丁目 | 75円 |
| | | 鍾路六丁目 | 75円 |
| 本町平均 | 271円 | 鍾路平均 | 192円 |

表4 京城府管内地籍目録1917年度版、1927年度版、京城共同株式会社より作成

| | | 日本人 | 韓国人 | 国有・その他 | 合計 |
|---------------|----|---------------|---------------|---------------|------|
| 1917 | 本町 | 442 (78.1) | 36 (6.4) | 88 (15.5) | 556 |
| | 鍾路 | 86 (7.7) | 949 (85.0) | 82 (7.3) | 1117 |
| 1927 (S.2) | 本町 | 628 (76.8) | 15 (1.8) | 175 (21.4) | 818 |
| | 鍾路 | 127 (10.8) | 658 (56.0) | 392 (33.3) | 1117 |

に当時5軒あった百貨店の内の三越百貨店・三中井百貨店・平田百貨店の3軒が集中している。また入り口には郵便局や銀行等の公共建物が並び、まさに京城の商店街の中心的な街であったことがよくわかる。本町2丁目には文化品類を扱う店が53軒も建ち、本町全体の4割弱がここに集中する。3丁目になると食料品店が多く並び、通り全体の食料店の5割を占める。4,5丁目は住宅の割合が増える。また5丁目には4軒のおでんやははじめ飲食・サービスの店の割合が高くなる。

本町通りは1丁目から3丁目にかけては家族で買い物や食事を楽しむ商業空間が続くが、4丁目から5丁目になるとその先に新町遊廓が続くこともあって、一杯飲み屋やカフェが並び、男性客たちが往来する夜の空間に移り変わっていく。線的变化に富んだ通りであ

表5 本町商業分類表 京城府商店街調査1936年京城府より作成

| | 買回り品 | 最寄り品 | 特殊専門店 | 飲食サービス | その他 | 合計 |
|-------|-------------|------------|-----------|------------|------------|-----|
| 本町一丁目 | 51 (32.7%) | 20 (12.8%) | 8 (5.1%) | 40 (25.6%) | 37 (23.7%) | 156 |
| 本町二丁目 | 111 (45.7%) | 26 (10.6%) | 11 (4.5%) | 58 (23.6%) | 39 (15.9%) | 246 |
| 本町三丁目 | 50 (33.6%) | 28 (18.8%) | 6 (4.0%) | 41 (27.5%) | 24 (16.1%) | 149 |
| 本町四丁目 | 60 (39.5%) | 21 (13.8%) | 4 (2.6%) | 32 (21.1%) | 35 (23.0%) | 152 |
| 本町五丁目 | 9 (8.6%) | 8 (7.6%) | 6 (5.7%) | 35 (33.3%) | 47 (44.8%) | 105 |
| 合計 | 281 | 103 | 35 | 206 | 182 | 807 |

表6 鍾路商業分類表 京城府商店街調査1936年京城府より作成

| | 買回り品 | 最寄り品 | 特殊専門店 | 飲食サービス | その他 | 合計 |
|-------|-------------|------------|------------|------------|------------|-----|
| 鍾路一丁目 | 48 (36.0%) | 7 (5.3%) | 18 (13.5%) | 21 (15.7%) | 39 (29.3%) | 133 |
| 鍾路二丁目 | 105 (43.4%) | 13 (5.4%) | 28 (11.8%) | 25 (10.3%) | 71 (29.3%) | 242 |
| 鍾路三丁目 | 54 (43.2%) | 12 (9.6%) | 13 (10.4%) | 25 (20.0%) | 21 (16.8%) | 125 |
| 鍾路四丁目 | 20 (21.1%) | 17 (17.9%) | 9 (9.5%) | 21 (22.1%) | 28 (29.5%) | 95 |
| 鍾路五丁目 | 13 (14.8%) | 16 (18.2%) | 9 (10.2%) | 12 (13.6%) | 38 (43.2%) | 88 |
| 鍾路六丁目 | 17 (25.0%) | 4 (5.9%) | 5 (7.4%) | 3 (4.4%) | 39 (57.4%) | 68 |
| 合計 | 257 | 69 | 82 | 103 | 236 | 751 |

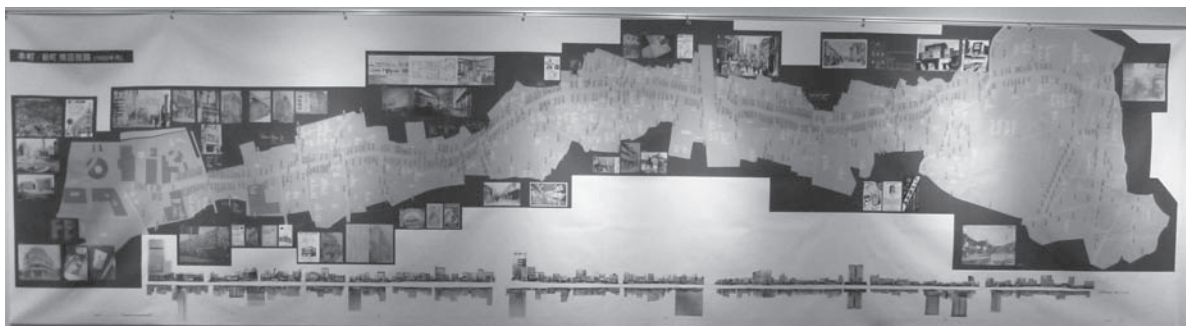


図8 本町全体の復元地図

る。

鍾路は2丁目がもっとも繁栄している。各丁目の商店数は1丁目が145軒、2丁目が252軒、3丁目が127軒となるが、4、5、6丁目はそれぞれ100軒を下回り、2丁目の商店数が他に比較して高い。土地価格のことも考え合わせると、2丁目が鍾路の通りの中心であることを示している。分野別にみると1丁目に金融・事務所が集まっている。2丁目には和信百貨店をはじめ衣料品、文化品、飲食店が数多く集中し、更に病院、教会関係の施設や市民の集まる公園もこの2丁目にある。日が暮れるとこの2丁目の歩道部分を中心に100軒以上の夜の市場が出し、にぎわった。

【建築】

今展示物の中から当時の京城の1930年前後の商店建築の性格がよくうかがえる3つの建物を紹介しておきたい。いずれも雑誌「朝鮮と建築」に発表された作品である。

【本町ビルディング】

本町ビルディングは本町2丁目3番地の角地に位置する地上3階地下1階の鉄筋コンクリート造である。本町に事務所を置く相澤工務所の設計である。本町ビルディングの経営者である篠崎半助の談話が面白いので次に紹介する。「それまでの敷地が大和軒からの借地であったこと、建物が手狭になったことの2つの理由により、現在自己所有する敷地に計画建設する事になり、設計や建設期間を考慮して5年から8年先をイメージして建物を計画した。自社店舗としてはゆとりがあるので、デパートメントストア的な意味合いを持たせることを意図し、数店の商店が入居する。設計に当たっては技術家の意見を聞き一切任せたのであるが、すでに20年来京城にいた自分の経験も生かし、本町通りに相応しい、また京城の舞台にあてはまるものを作りたいという目的でいくつかの願いをした。元来商店建築はただ強いというだけではごつくなるので店の正面のスタイルは入り口を低くしてどんな人々でも入りやすいことを主眼に置くこと、また1階の階段は土足のままで上がるのに差し支えないという印象を与えるためにコンクリート仕上げとし、2階に上がったならばニス塗りの木造階段にして柔らかみを出す工夫

が必要である等の事を提案した。この工事で最も苦労したのは地下室工事であり、この敷地は地下水脈のもっとも激しい場所で防水に苦労をした。この建物が今後成功するか否かは個人の問題だけでなく、この町の将来がかかっており、幸いにこの事業が成功すれば本町に堂々たる銀座通りが実現する時期が早められると大いに期待している。」(『朝鮮と建築』1925年8月号「本町ビルディングが出来るまで」と熱く語っている。図面を見ると屋上までエレベーターが設置されており、白色化粧をしたレンガ張りビルディングのルーファードンには精巧なラジオが取り付けられて一般公開されるとともに、立派な望遠鏡を据え付けて簡単な観測が自由にできるようにして、盛夏の本町通りでは唯一の納涼場所を提供する計画としていた。複合商店の入居、そのためのエレベーターの採用、一般公開された屋上空間等々、個人事業主の当時出現した百貨店への対抗意識が計画によく表れたモダンな商店建築である。

【本町総合ビルディング】

この建物も相澤工務所の設計で、施工は佐藤熊太郎が請負い、1926年完成の地下1階、地上3階の9人店主、1人未定の10商店用共同ビルである。建坪は134坪、延床面積が531坪、1商店当たりになると平均13坪、延坪53坪の小さな店である。敷地は本町1丁目入り口の中央郵便局東側角の繁華街である。京城中央郵便局からの払い下げが実現して出来上がった。本町総合ビルディングは計画当初は各商店が別々に建設することで進んでいた。餅屋は和風に、呉服屋は土蔵風に、お菓子屋は2階まで階段を広く取ってほしいと意見がまちまちであったが、設計者側からの提案で共同で1つのビルディングを建設することにした、当時としては珍しい事例である。その大きな理由は京城の1等地で地価が高く、建築費をできるだけ低く抑える必要があった。またそれは各商店の間も壁1枚で済むために土地の有効利用にもつながることであった。実際建築費は3割減で出来上がった。地上階が店舗、上に住居、地下に倉庫が当てられた。店によっては2階まで店として使うところもあった。商売の種類によって階段の位置や幅が異なり、それが各店の個性を出せる結果ともなった。外観は単純なコンクリートに塗り

本町ビル

- 建築概要 -

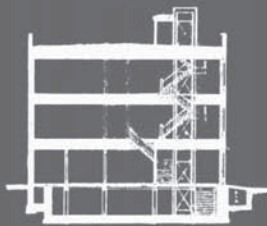
旧住所：京城府本町2丁目3-6
 現住所：ソウル特別市中区忠武路2街
 起工：1924年6月
 竣工：1925年6月
 設計者：相澤工務所
 施工者：(未詳)
 構造：混構造(木造+煉瓦+鉄筋コンクリート)、3階(地下1階)
 出典：『朝鮮と建築』1925年5月号/1925年8月号
 図面：『朝鮮と建築』1925年8月号



南側立面図



東側立面図



西南断面図



南北断面図



1階平面図



2階平面図



3階平面図



4階平面図

図9 本町ビルディング

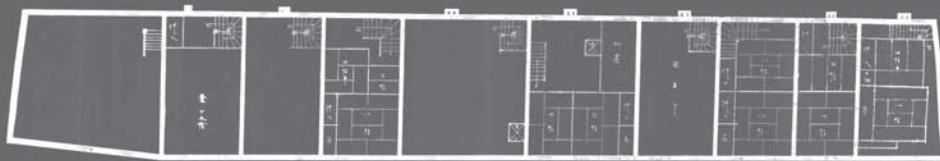
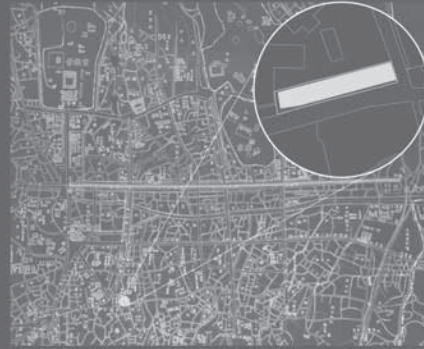
京城本町総合ビル

- 建築概要 -

旧住所：京城府本町1丁目18
 現住所：ソウル特別市中区忠武路1街
 起工：(未詳)
 竣工：1926年1月
 設計者：相澤啓治建築設計監督工政所
 施工者：佐藤熊太郎
 構造：3階(地下1階)
 出典：『朝鮮と建築』1926年1月号
 図面：『朝鮮と建築』1926年1月号
 写真：『朝鮮と建築』1926年1月号



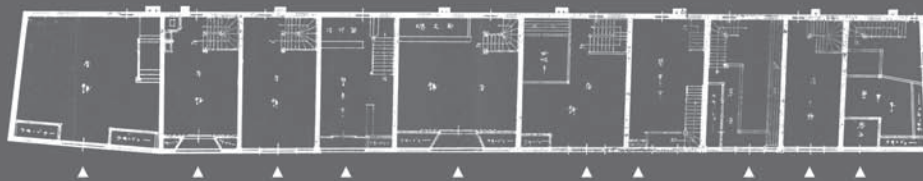
外觀正面



3階平面図



2階平面図



1階平面図



地下1階平面図

図10 本町総合ビルザング

京城三越支店

- 建築概要 -

旧住所：京城府本町1丁目52-2
 現住所：ソウル特別市中区忠武路1街52-1
 起工：1929年3月
 竣工：1930年10月
 設計者：三越建築事務所
 施工者：多田工務店
 構造：混合構造(煉瓦+鉄筋コンクリート)、4階(地下1階)
 出典：『朝鮮と建築』1928年11月号／1929年4月号、7月号／1930年1月号
 図面：『朝鮮と建築』1930年11月号
 写真：『朝鮮と建築』1930年11月号



新館落成透視図



3階応接室



中央玄関



東側玄関



4階大食堂



中央階段



社交室



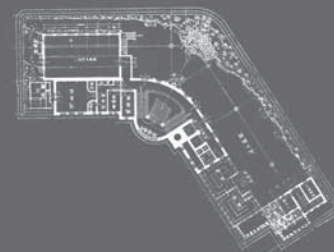
地下1階平面図



1階平面図



4階平面図(標準階)



屋上階平面図

図11 三越京城支店

仕上げとし、各店はショーウィンドウと看板によって特徴を出すこととした。このとき従来の横長の大きなペンキ塗りの看板は共同ビルには馴染まず、洒落た金文字の立て看板が似合っていた。この他小さな1階店舗面積を最大限利用するために2階に便所を持って行ったのも大きな特徴で、これはなかなか好評だった。この共同ビルは大きなガラスのショーウィンドウやタテ型看板の店舗ファサード、それに土地有効利用の壁共有ビルと、その後の新しい都市風景が出現してくる契機となった民間個人商店建築の好事例である。

ちなみに1930年代の10軒の商店を本町入り口側から上げれば、「日本楽器製造会社京城出張所」「菊秀刀物店」「イワヤ洋品店」「三好野」「ますや呉服店」「高木鞆支店」「甘栗太郎京城支店」「本一果実商店」「金城堂書店」「黒川精肉店」と様々な種類の商店が認められるのである。

【三越京城支店】

三越は現在の新世界百貨店である。当時も朝鮮半島でもっとも有名な百貨店であった。本町通り入り口の朝鮮銀行前ロータリー広場に面した元府庁舎跡地に位置する。地上5階地下1階の鉄筋コンクリート構造のネオ・ルネッサンス様式である。敷地面積は730坪余、延床面積は2252坪、屋上庭園だけでも230坪もある。設計は三越建築事務所、建築請負業者は多田工務店である。工事は1929年3月に着工し、1930年10月に竣工した。

設計者の談によると、この場所は京城のなかで最も商業に適した場所であり、その外観には必要十分な配慮が検討されたとのことである。日本にも何回も見学に出かけた。その結果、自由な明るい感じの建築であること、そしてかつ落ち着いた親しみのある感じを出すために様式は清楚なネオ・ルネッサンス様式でまとめ、機能も徹底してお客本位にすることとした。意匠は内外の色彩の調和に注意し、彫刻や装飾は優雅で柔らかみのあるものにするものとした。また、正面をどちらに向けて配置し、玄関とショーウィンドウをどこに計画するか等のために何日も広場に立って計画した。また雪の降った後には人々の靴の後ろを観察して、人通りの流れと量を分析した。関東大震災のあとであり、特に耐震耐火には注意を払って基礎工事や防火区

画に腐心した。現場が始まると、詳細図、原寸図、模型を作って時間をかけ、作業を進めた。また施工にあたっては複雑な石工事や鋳物工事が多数あったが、出来るだけ朝鮮のなかの工場に朝鮮人、中国人の手で施行するようにした。このため工事の終わった後には技術が上がり、職人が育って、難しい工事でも国外に発注しなくても出来るようになったと工事責任者は述懐している。

各階の配置について説明すると、1階は中央広間、一般売り場、内外ショーウィンドウ、朝鮮物産陳列所、買い物相談所、ツーリスト・ビューロー、化粧室、事務室（通信販売、出納係、庶務係、外売係、宿直室等）、中2階には店員用食堂等の事務用スペース、2階は一般売り場、休憩所、美容室、着付け室、及び事務室（電話交換室）、3階は一般売り場、婦人社交室、仮縫い室、仕上げ室、応接室、ベランダ、及び事務所（支店長室、仕入れ係室等）、4階は一般売り場、三越ホール、同舞台、楽屋兼第2ホール、大食堂、休憩所、及び調理室等、5階は屋上庭園、展覽会場としての三越ギャラリー、写真室及び待合所、茶室、温室及び園芸用具売り場、稲荷神社、6階には展望台がある。地階は売り場、買上品預り品受け渡し場、理髪室、靴磨き所、地階食堂、事務側としては調理室、金庫、倉庫、設備室等である。エレベーターは定員20名の客用が2台、店員用1台が設置された。

売り場はもちろんのこと、靴磨きから、美容、ホール、写真館、ギャラリー、屋上の庭園、展望台と、現在の百貨店でも備えることのできない多様でモダンなサービス機能が地階から屋上まで全館ぎっしりと計画配置されていたことを知り、驚くのである。

建物は1945年終戦の後、ショッピングアーケード風の「東亜デパート」に商号を変更した。その後は政府が全館を接收して米軍の生活用品店として利用していた時期もあった。1963年に三星財閥が購入し、5階部分を増築して、1979年三星直営の「新世界百貨店」として今日まで市民に親しまれてきている。

今回開催された横浜の巡回展においても前回同様に若い人だけでなく戦前ソウルで生まれ育った方々が遠方からお見えになり、復元地図で確認したり、映像を

食い入るようにご覧になっていた。また展覧会が終了した後も非文字資料研究センターに資料提供の申し出や問い合わせが続き、韓国からの研究者と共に対応に務め、貴重なインタビューの機会も生まれている。

ここまでの研究は建物1軒1軒からようやく街路や通りに対象が展開してきたが、今後期待されるのは繁華街や街を対象にした研究である。つまり点から始まって線に展開し、今後はこの巡回展を1つの契機として面へ移行してのソウルの都市空間研究が行われることを若い研究者に期待したい。そしてその成果が研究者の中だけで狭く共有されるのではなく、広く社会に発信還元していける内容と発表形式にしたいものである。

本概要の〔本町・鍾路〕の部分は1988年日本生活文化史学会大会発表の『本町通りと鍾路通りについて～日本時代のソウル都市論』の原稿にその後の新しい知見を加え修正している。

また本文中、当時の地名、町名、固有名詞などの呼称はそのまま用いたことをお断りしておきたい。